

感染症

座長：久 保 俊 一

新生児や乳幼児，またアトピー性皮膚炎や喘息に罹患している小児では免疫力が弱く compromised host として感染症を発症することが多い．整形外科領域での骨髄炎や化膿性関節炎においては的確な早期診断と早期治療がその運動器としての予後を大きく左右する．今回，主題として発表された内容から近年，松原先生や井上先生の報告のように起炎菌として黄色ブドウ球菌から MRSA やインフルエンザ菌の頻度が高くなってきたようである．また，衣笠先生の報告からも慢性の骨関節疾患では結核菌も常に念頭におく必要がある．さらに，敗血症のように多発性の関節炎を生じることも多いため，富沢先生の報告のように常に四肢をくまなくチェックすることが大切である．

化膿性関節炎の治療にあたっては従来の切開排膿洗浄だけでなく，浅海先生の発表のように低侵襲な鏡視下デブライドの報告も増えている．田畑先生はパピノー法のように難治性骨髄炎に対する開放創療法の有効性を報告した．問題は初期に起炎菌が同定できない場合が多く，早期治療にあたってどの種類の抗生剤を投与するかということである．一般的にブロードスペクトラムのセフェム系を使用することが多いようであるが，強力なカルバペネム系を初期から使用すると立場も多く，会場の参加者の中でも意見は分かれた．今回の発表から最近の起炎菌の動向や治療法，および抗生剤の使用方法を念頭におき今後の日常診療に役立てていただきたい．